

幼稚園における漢字教育の効果に関する追跡研究 — 認知能力の発達の観点から —

○吉田 恒子 柏野啓子 黒田実郎

聖和女子大学

柏野・黒田(1970)は幼稚園における漢字教育の効果に関する研究において、いわゆる〈石井方式漢字教育〉を保育のなかにとりいれている幼稚園(実験群とよぶ)と、全く漢字教育を行なっていない幼稚園(対照群とよぶ)の園児それぞれ56名、計112名を対象に漢字テスト、図形テスト、知能テストを5期にわたって実施した。その結果、漢字テストでは勿論、両群の間に有意な差が認められたが、図形テストにおいても、調査開始時にはみられなかった両群の差が、約1年後の第5期にいたって統計的にも有意に認められた。この結果について柏野らは、漢字教育が図形テストで測定されることとの推理、知覚、空間因子の発達の面で効果を示すのではないかという問題点を提起し、更に、漢字教育の本当の効果を判断するためには、該当被験児の追跡調査をする必要があると示唆している。本研究は、この種の縦断的調査の少ないところからも、柏野らの調査(調査Iとする)と同じ被験児を対象に再調査(調査IIとする)を実施して、まづその様相を捉えること、即ち幼稚園時代に生じた漢字テスト、図形テストにおける差がどのような経過をたどるのかその容を明らかにして、幼稚園において漢字教育を導入した場合の効果について、更に検討する手がかりを得ようとしたものである。

方法: (1)被験児 調査Iの被験児で再調査の依頼に応じた55名。昭和

表1 被験児数

群	学年	1	2	計
実験群		15	12	27
対照群		14	14	28
計		29	26	55

46年8月現在、小学校1年生(調査Iの時期では年少組)と小学校2年生(調査Iの時期では年長組)に在学中のもの(表1)。

(2)テスト 漢字テストは調査者の作成した漢字カード100枚を使用。6X8cmの白厚紙に1字で意味のある名詞を黒インキで書いたもの。但し50字

は柏野らの用いたもので、今回は更に50字を追加。現在小学校で使用されている国語の教科書(光村図書出版)から、〈石井方式漢字カード名詞2〉にないものを基準に3年生20字、4年生20字、5年生10字の割合で選抜。図形テストは調査Iと同じJ.C.RavenのColoured Progressive Matrices(1956)を使用。これは色彩のついた幾何学的図形36種が各頁に1種ずつあり、各図形のもつ欠損箇所に適した部分図形を、各頁の下にある6種の中から被験者が選択するもの。時間制限なし。知能検査は小学校低学年用田中B式知能検査を使用。

(3)手続 昭和46年8月に被験児は各卒業園に来園。3種のテストをランダムな順序で実施。知能テストは2,3人のグループで行ない、漢字テストはカードを各被験児にランダムな順序で提示し、音読み、訓読みどちらも正答としてその数を得点とした。図形テストはRavenに従った教示を与えて36種を順次提示し、正答数を得点とした。

結果: 被験児55名についての調査Iにおける結果をその資料からあらためて抽出し、今回の調査とあわせて、調査Iにおける第1期(調査時期1とする)、第5期(調査時期2とする)、調査II(調査時期3とする)の3段階にまとめた(表2, 図1, 図2)。知能テストでは両群の間に、全くIQの差が認められなかったため、こゝには省略した。

表2 テスト得点とt値

調査時期	学年	漢字			図形		
		実験群	対照群	t	実験群	対照群	t
1年生(年少組)	1	1.0	0.8	—	12.7	12.9	—
	2	17.5	1.6	*** 4.38	19.3	14.9	** 2.91
	3	33.5	17.0	*** 4.26	25.3	21.6	△ 1.98
2年生(年長組)	1	23.8	6.7	** 3.69	16.8	16.0	—
	2	37.3	13.1	*** 6.89	25.3	18.3	** 3.03
	3	50.4	48.9	—	29.8	24.3	* 2.72

***P<.001 **P<.01 *P<.02 △P<.10

表3 被験児の平均年齢

学年	1(年少)	2(年長)
1	4:8	5:5
2	5:6	6:3
3	6:11	7:8

なお各調査時期における被験児の平均年齢を表3に、各調査時期において実験群がその時までに行った漢字教育の期間を表4に示した。

表4 実験群が在園時に受けた漢字教育期間(月数)

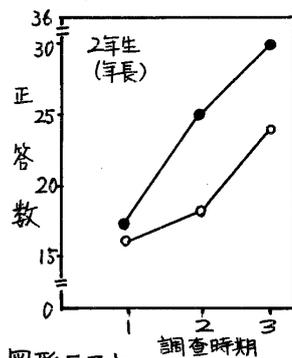
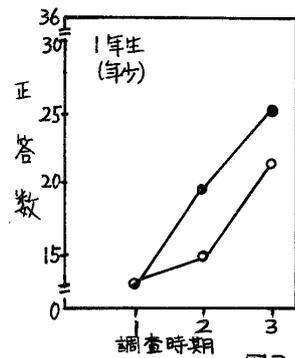
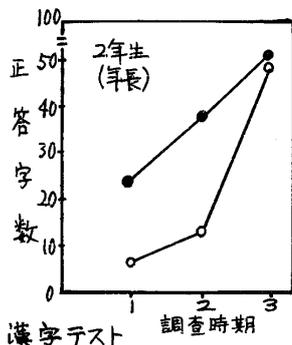
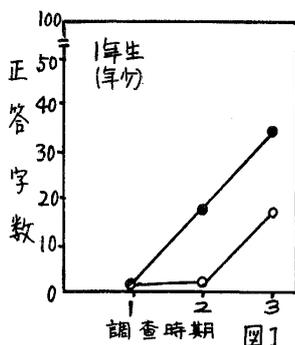
学年	年少(1年)	年長(2年)
1	0	6
2	12(24)	18

表4の年少組は調査時期2以後、更に12か月在園しているから総計(24)か月となる。

表5は、漢字テストと図形テストについて、群(2)×調査時期(3)の分散分析を行なった結果である。

表5 分散分析表

要因	漢字		図形		*** P<.001
	1(年少)	2(年長)	1(年少)	2(年長)	
群 (df=1)	*** 15.55	*** 19.33	* 5.40	*** 6.83	** P<.01
調査時期 (df=2)	*** 81.90	*** 99.89	*** 85.46	*** 61.37	* P<.05
群×時期 (df=2)	*** 11.21	** 5.22	* 4.43	** 5.30	



● 実験群(1年生n=15, 2年生n=12) ○ 対照群(1年生n=14, 2年生n=12)

〈結果1〉図1, 図2, 表1をみると年齢の推移とともに両群ともに得点は上昇しているが、その上昇率が実験群と対照群で有意に異なっている

ことが分る。即ち実験群においては、在園中から小学校1, 2年生にかけて両テスト得点が有意に上昇しているが、対照群の場合は小学校入学以後に有意な上昇を示しているのである。

〈結果2〉更に各時期における両群の差について行なったt検定(表2)の結果も参照すると、漢字テストでは(2)年長組の場合、調査時期2において両群の間に認められた0.1%以上の有意差は、卒園後1年有余にあたる小学校2年生時には、対照群の得点が急激に上昇して、全くみられなくなっている。但し調査時期1において既にみられる両群の差は、実験群の幼稚園でその6か月前より漢字教育の導入が始められていたためと思われる。(b)年少組の場合は、調査時期1(入園当初)では両群の得点が殆んど0になっており全くその差はないが、1年後の調査時期2になると、実験群の方が急激な上昇を示して0.1%以上の有意差が認められる。更に1年後の小学校1年生時においてもこの差は継続して有意になっている。図形テストにおいては(a)年長組の場合、調査時期1の時点(漢字教育6か月)では両群の得点がほぼ等しく差はないが、調査時期2(漢字教育18か月)では実験群の得点が急激に上昇して、1%以上の有意差を示している。この差は卒園後1年有余を経た小学校2年生時においても有意に認められる。(b)年少組の場合も同じ傾向を示している。

考察: 石井方式による漢字教育を保育に導入することにより、確かに在園時の読字力に差が生じて小学校1年生初期にもなお維持されているが、2年生になるとその差は消失していると考えてもよいのではないかと。一方、一般知能においてIQの差が認められなくてもRavenのマトリクテストに示される推理、知覚、空間因子に代表される認知能力では、在園時に生じた差が小学校2年生時においても持続しているのではないかと推察される。これらは幼稚園におけるいわゆる漢字教育の意味を考えさせるものであるが、この現象を更に確認する必要があり、そのためには適切なる研究法の検討とともに、より大きな標本を用いた、より長期間の追跡研究が必要である。